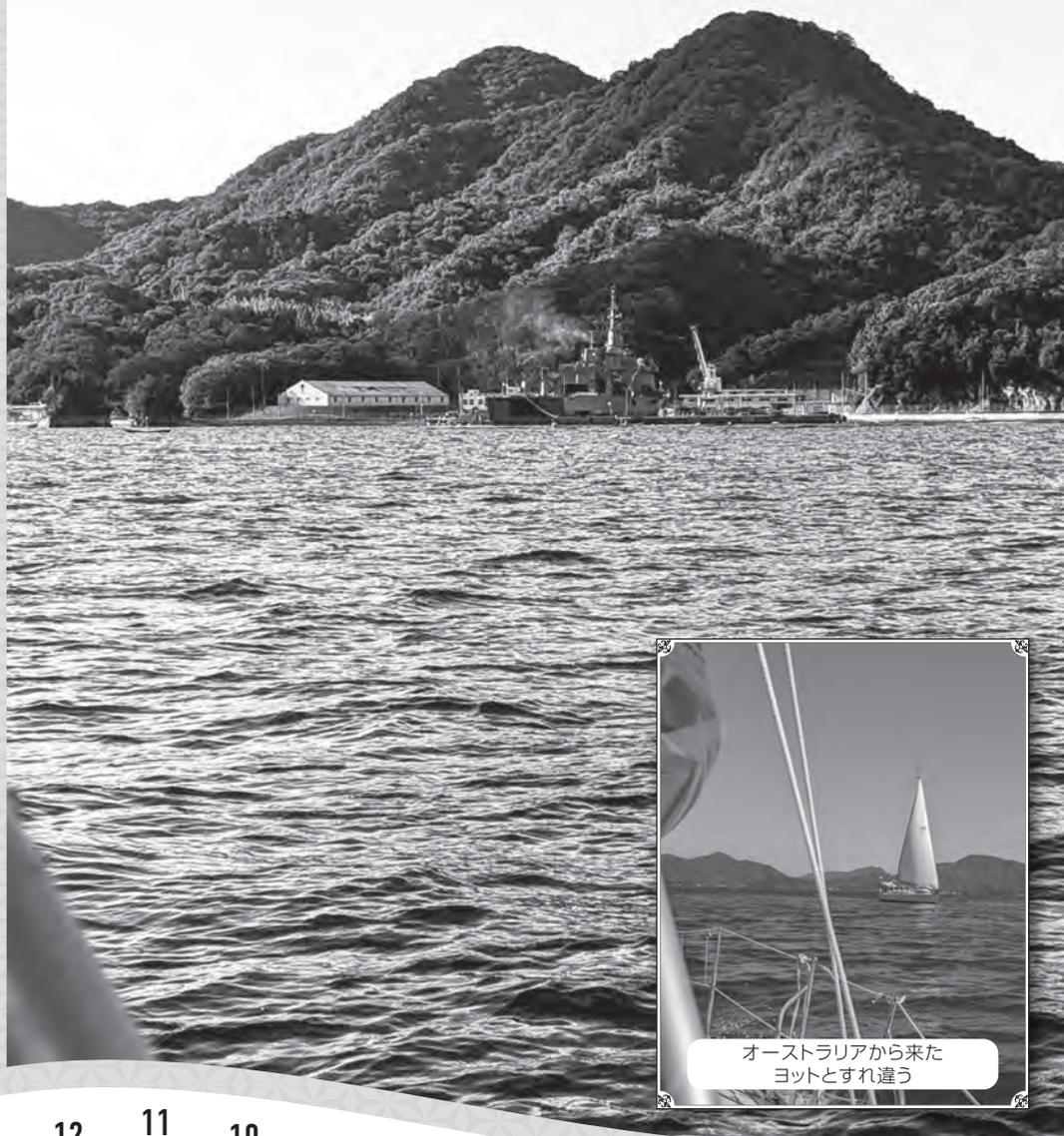


寺子屋ズット



オーストラリアから来た
ヨットとすれ違う

古鷹山

広島県江田島市

※詳しく解説は12頁に掲載しております

※題字／森川芳聲

もくじ

- 2 巻頭言“謹賀新年”……………山口 秀範
- 3 鄙爺日記その⑤……………猪部 敬彦
- 4 偉人レポート……………久々宮 章
- 6 「この二冊」-『言志四録』(佐藤一斎著)……………安藤 洋志
- 7 母のこと伯母のこと③……………高見澤 玉江
- 8 『歴史と記憶』について①……………小磯 仁
- 10 TERAKOYAふおとればーと
- 11 “あちこちde寺子屋”のご案内
- 12 山とものがたり(4) 余録



「謹賀新年」

代表世話役

山口 秀範

令和八年の初春をお揃いで迎えられたこととお慶び申し上げます。

寺子屋モデルは昨年二月で創立二十周年を迎えたのですが、志明館の開校もあつて周年記念を開催するには未だ道半ばと思ひ定め、四年後の「二十五周年」までお預けとさせていただきます。

本年もご理解・ご支援をお願い致します。

森信三の予言

昨年の年頭に、信頼出来る複数の識者が揃つて、教育哲学者・森信三の以下の「予言」を取り上げたことをご記憶でしょうか。

「二〇二五年、日本は再び甦る兆しを見せるであろう。そして二〇五〇年になったら列強は日本の底力を認めざるを得なくなるであろう」

この言葉を目にして一年が過ぎました。私としては「志明館の開校こそがその奇跡を起こす種子の一つだ」と声を大にして訴えたい気分でした。

早いもので四月からは三度目の新入生を迎え「自ら考へて自ら行動する」という志明館独自の教育プログラムは様々な実践を通じて芽を吹きつつあります。二十四年先の「日本の底力」に貢献するようになることを祈るばかりです。

首相答弁

昨年十一月の衆院予算委員会で台湾有事に関する質問に高市早苗首相は次のように答えました。「(中国が)戦艦を使って、(米国への)武力の行使も伴うものであれ

ば、どう考えても存立危機事態になり得る」。

この答弁で、我が国が集団的自衛権を發動する可能性に言及したのです。その後の北京政府の過剰反応は容易には取保ち、特に若い層からの首相支持の高さは頼もしい限りです。

NHKの「日曜討論」(十一月三十日)でも従来と異なる場面が放映されました。各党の政調会長に首相発言への見解を問う番組で、「国際社会では不断の情報戦が戦わされている。その中で国内の世論が不必要に割れば、他国を利するのみ」と与党から述べた後で、各野党の意見が求められました。これまでならば政府与党に対する批判反論が異口同音に繰り返される場面でしたが、この日は複数の野党から「首相は常識に叶った答弁をした」、「その後も毅然とした対応に終始しており発言の撤回は不要」とむしろ首相を応援する発言が相継ぎました。

一般国民の反応も概ね好意的で、首相への信認は依然として特に若年層で高支持が続いています。

潮目が変わる

故安倍信三首相が「戦後レジームからの脱却」を掲げて二十年を経ますが、戦後レジームの出発点は「アジア諸国へ一方的に侵略した挙句に敗戦し、連合国の占領を経て民主主義国家に生まれ変わらせた」という勝者の正義に根ざしています。厄介なのは、日本人自身が勝者の言い分に縛られたまま戦後を長く生きてきたことです。占領基本法とも言うべき憲法を金科玉条の如く八十年間遵守しているのが何よりの証左でしょう。

それを踏まえて、教育、家族、共同体から経済まで、戦後体制を見直し本来の日本国を取り戻そうと、

安倍流「戦後レジームからの脱却」が始動したのです。

しかしながらサイレントマジョリティの本心が明らかになるほど機が熟していなかったでしょう。マスコミの執拗な妨害(モリカケや桜を見る会など)もあり、最後は新型コロナウイルスの世界的蔓延にかき消された感がありました。

そうして辞任から五年、暗殺から三年。この間に誰が見ても国力の減退を余儀なくした指導者の出現もありましたが(それもこれからの日本の覚醒を明確に見せることに貢献して)、今こそ「戦後レジームからの脱却」が本番を迎える端緒が開かれたと私には感じられます。

今回の高市発言は、従来外交上曖昧にしてきた慣行から脱却して、「相手国の行動次第では、日本は自国と同盟国を守るために戦う」と静かに覚悟を語った、まさに戦後初の快挙と受け止めました。多くの国民の首相支持も、友好国からの肯定的な受け止めも、その点への共感と見て間違いのないでしょう。

二〇五〇年への兆し

『日本書紀』の最終巻持統天皇のくだりで、先帝天武天皇の弔問に訪れた新羅の外交官に天皇が詔を発せられる場面が詳述されています。「代表の官位が前例と比べて低く、乗ってきた船も一艘のみで「舳オビを並べて」朝貢した古来のしきたりに背いているので、供物の献上品は受け取らず封をして返還する」と毅然とした国家意思を表明されました。一方で「遠い皇祖の御代からの貴国への慈しみは今後も変わらぬ」と友好の道を閉ざすことはしませんでした。

古代の女帝に倣つて現代の女性宰相にも堂々たる外交を期待しますし、それを支える国民各層の頑張りも、我が国の「再び甦る兆し」を確かな奔流へと導くと信じて、新しい年に向かいたいものです。